

「興行地」 堺と芝居小屋

齊 藤 利 彦

はじめに

歌舞伎芝居は文政期にもなると、全国的規模で地域的にも階層的にも広範かつ深奥な拡がりをみせるようになる。木村黙老はその著書、『劇場一観顕微鏡』（文政十一年（一八二八）刊）で、当時の三都以外の興行地を次のように列挙している。

其余諸国、尾州名護屋に芝居若宮八幡稻荷等三ヶ所にあり、紀州和歌の山、常州水戸、伊勢、堺、伏見、大津、備中宮内、芸州宮嶋、奥州仙台、讃岐金毘羅、長崎、阿州徳島、南都、和州郡山、此外諸国諸郡、時々芝居興行の所は夥しくありて、枚挙するに遑あらず^{〔1〕}

右にあげられた興行地には、名古屋、和歌山、水戸などの諸藩の城下町だけではなく、堺、伏見、大津、奈良といった京、大坂周辺に位置する、幕府直轄の遠国奉行支配地もふくまれている。

このうち、筆頭にあげられている堺は、伝存する番付類などの史料から、当時、名古屋や伊勢の興行には劣るとしても、全国的に有数の興行地であつたといえる。その証左として、文化八年（一八一二）板の役者評判記『役者出精嘶』の口上をみると、

〔作者〕 当年より格別に骨折相改

ヒイキ 三都は勿論伊勢尾張堺等にての狂言を不漏取調へさせ

〔作者〕 諸方好

人方之御目鏡をかり至極微細に評判付仕候^②

とあり、当時、三都でも名古屋や伊勢の興行とともに、堺の興行がすでに看過できないものになっていたことがわかる。

「興行地」堺についての先行研究としては、『元禄二己巳歳堺大絵図』（以下、『堺大絵図』と略）を分析・検討され、近世都市のあり方を考察し、その際、元禄期の堺の芝居小屋について言及した朝尾直弘氏の成果^③、元禄期の上方の芝居小屋を考察する一事例として、堺の芝居小屋の構造などを明らかにされた藤田実氏の成果がある^④。筆者はかつて、堺の歌舞伎芝居の興行年表稿を提示するとともに、堺に対する天保改革の取締まりの実態とその影響について言及した^⑤。さらに、天保改革後の堺の寺社内芝居再開の原因や寺社内芝居の動向、内情について考察した^⑥。前者において、「興行地」堺と芝居小屋の変遷については表を提示するなどして整理したが、紙幅の関係上、十分に考究できず、課題として残った。筆者が十分に考究できなかったこの問題に関しては、早くに『堺市史』第三巻「劇場の変遷」が言及しているが^⑦、芝居小屋の移転時期や移転場所、その名称などで間違った指摘がなされている。『堺市史』第三巻をはじめとして、諸書において芝居小屋の移転時期や移転場所、その名称などで混乱がおこっているのは、芝居小屋が単に立地場所を移転している場合と移転の際、櫓名代も移転し名称が変わっている場合などがあり、これらの点が十分に整理されていないからである。

このように「興行地」堺についての研究は、元禄期あるいは天保期とそれ以降に集中し、さらに芝居小屋については訂正されなければならない箇所があるなど問題点が残る。芝居小屋が都市の中でどのような場所に位置づけられ、それがいかなる環境を形成し、そしてどのような変遷をたどったか、を考察することは近世都市、さらには近世社会における芸能開催、芸能表現の「場」のもつ性格を考える上でも有意義なことであろう。

そこで本稿は、定芝居が公許された寛文延宝期から天保改革までを中心に、「興行地」堺とそこに存立した芝居

小屋の実態を整理・検討したい。そのなかで、芝居小屋の変遷における移転時期や移転場所、その名称などを丹念に整理し、それによって、移転時期や移転場所、その名称などを確定し、この基礎的作業を通じて、寛文延宝期から天保改革までの時期を中心に「興行地」堺と芝居小屋について考察していきたい。⁽⁸⁾

一 定芝居公許と「興行地」堺の成立

1 定芝居公許とその規模・構造

堺では三都が「興行地」として成立したと考えられる寛文延宝期に、二軒の定芝居が公許され、以後、近世を通じて定芝居が二軒存在することとなる。

二軒の定芝居のうち、まず寛文十年（一六七〇）八月十日、南郷の外縁にある鑑町に鑑町芝居が公許された。⁽⁹⁾ 鑑町は堺南郷江川町の西、大道の西七筋目の通りを挟む両側と小農人町と江川町の南、南半町側の飛地からなる、文字どおり鉤状に曲がった町である。鑑町の飛地は南半町の西にある舞台町を分断するかたちで存在していた。これまで鑑町芝居は鑑町に立地しているとされてきたが、『堺大絵図』⁽¹⁰⁾ から、厳密には、鑑町芝居は舞台町を分断する鑑町の飛地に立地していることがわかる。そのため一見、舞台町に立地する芝居小屋と思われたものと考えられるというのも、享保十九三年刊役者評判記『役者初子売』京巻で「堺南端舞台町芝居」⁽¹¹⁾ という名称の芝居小屋がでてくることから指摘できる。この芝居小屋は鑑町芝居をさしていると考えられる。鍵町芝居の番付は現在、写真版が一枚伝存するのみであるが、それには「鑑町定芝居」と記してある。⁽¹²⁾ この番付がどこから出されたかについては不明だが、このことから当時、「鑑町芝居」、「舞台町芝居」と両方の名称で呼ばれていたと考えられる。

次いで延宝五年（一六七七）十二月、戎嶋清水町に芝居小屋が建てられ、翌六年（一六七八）正月十五日に戎嶋

芝居として公許され初芝居興行が行われた。¹⁴『老圃歴史』寛文八年（一六六八）条に「戎嶋芝居初ル、十月茶屋五軒御免、茶建女付」とあり、戎嶋芝居は当初、非公許の仮小屋で興行していたのが、櫓免許赦免にあたり、延宝五年十二月、芝居小屋を新築し、翌六年正月十五日に初芝居興行が行われたものと考えられる。

この公許によつて、市中に興行の「場」が特定され、興行の「機会」が保証されたことになる。そしてこれ以後、堺では常設かつ常時、興行ができる定芝居が近世を通じて二軒存在することとなる。

定芝居が公許される以前の興行については判然とはしないが、明暦四年（一六五八）六月、堺奉行石河利政が發布した掟書二十八カ条に、

一 芝居見物之事

右有来如法、奉行所へ書付持来可下知、喧嘩口論無之様に急度可入情、兼而如触知奉行所之号役人等、無入之族於在之者、其身を押置早速注進可申来、令用捨後日ニ於相聞者、可為曲事也¹⁵

とあることから、明暦四年前後では、非常設・非常時の興行が一定の手続きのもと許可されていたことがわかる。

寛文延宝期の興行内容は不明であるが、元禄初年あたりから、京坂の役者や浄瑠璃太夫などによつて、京坂と同様の興行が行なわれている。元禄二年（一六八九）、義太夫節の大成者である竹本義太夫が初来堺したのを機に、その後定期的に堺で興行している。義太夫がその活動初期より堺で興行していることは注目できよう。義太夫とともに浄瑠璃を興隆に導いた太夫である豊竹若太夫は、諸国修行に出、「そのもどり堺南の端」すなわち鑑町芝居「にて芝居をとりく」んだのが、元禄十六年（一七〇三）五月七日よりの興行であつた。この時、彼は堺近辺で起こつた心中事件、すなわち材木屋糸屋の娘お初が隣屋の手代久兵衛と恋仲になり、河内へ欠落ちの途上、百舌鳥の畑の古井戸にて情死した事件を題材に『心中泪の玉井』なる狂言を出したのが評判よく、その勢いで大坂に進出し

『さかいみやげ心中泪の玉井』として上演し成功をおさめた⁽¹⁶⁾。堺での興行が彼の以後の活躍の基盤を築いたといえる。また時期が少し下るが、宝永元年（一七〇四）には篠塚次郎左衛門が堺で興行を行なったが「あまりはや」らず不入りであった⁽¹⁷⁾。このように京坂と同様の興行が行なわれているのと平行して、茶屋や貸座敷茶屋といった芝居小屋周辺の施設は、寛文延宝期から元禄期に公許されている。堺では、この時期に市中の遊興施設を集中的に公許し、整備している⁽¹⁸⁾。

元禄十三年（一七〇〇）三月刊『役者万年暦』開口部「芝居一代男」をみると、堺での興行の際、座本が「初めてから五日めに役者の給金半払のやくそく」をしていたことや、銀主を指すであろう「素人の金本」が興行に関わっていたことなどが描かれている⁽¹⁹⁾。役者評判記の開口部が評文部導入の浮世草子風の虚構であることは考慮せねばならない⁽²⁰⁾。しかし開口部の逸話に、堺での芝居小屋や興行内部の事情などを取り上げていることは、当時の三都、特に京坂の読み手がそれを読んでも、何ら不自然に感じない、十分に通用するからこそ挿入したといえ、堺が元禄末期には三都から「興行地」として広く認知されていた証左といえよう。

右でみたように、堺では元禄初年あたりから、京坂の役者や浄瑠璃太夫などによって、京坂と同様の興行が行なわれていた。このことを換言すれば、元禄期には京坂の役者や浄瑠璃太夫などの興行を受け入れることができる興行慣行や興行機構、芝居小屋周辺の施設などが整備、確立されていたことを意味しよう。すなわち、堺は二軒の定芝居公許を契機に、少なくとも元禄末期までには興行慣行や興行機構を整備・確立し、「興行地」として成立したと考えられる。

では、二軒の定芝居の興行慣行や興行機構、芝居小屋の規模・構造などどのようなものであったのであろうか。妙国寺蔵元禄十七年（一七〇四）堺「手鑑」⁽²¹⁾（以下、妙国寺本と略）、年代不明であるが内容を諸史料と照合した結果、「手鑑」の一部を抜粋したと考えられる「堺御手鑑諸法道法り」⁽²²⁾（但し元禄期の「手鑑」と推測される。以下、

「道法り」と略)をみると、鑑町芝居の興行機構は狂言名代井上七左衛門、浄瑠璃総代山本利太夫、舞名代荒川治左衛門、「芝居并地主」が土佐屋庄兵衛、土佐屋重兵衛、子師屋次郎兵衛からなっていた。ただし、『堺大絵図』では土佐屋重兵衛、辻ノ治右衛門掛屋敷、ねし屋次郎兵衛掛屋敷となつてゐる⁽²³⁾。

戎嶋芝居の興行機構については、前記史料より、狂言名代土佐屋七郎右衛門、浄瑠璃名代古手屋善兵衛、芝居小屋主土佐屋妙休、地主錢屋平左衛門、具足屋治兵衛、橘屋半左衛門となつており、鑑町芝居とは異なり芝居小屋主と地主が別々であつた。戎嶋芝居が以後、移転を繰り返すのはこのことが要因のひとつであつたといえよう。さらに「芝居掛り合之者」として古手屋五郎兵衛、納屋治右衛門、宮本太兵衛が名を連ねている。『堺大絵図』では具足屋次兵衛掛屋敷、土佐屋七郎右衛門掛屋敷、錢屋作右衛門掛屋敷となつてゐる⁽²⁵⁾。茶屋は吉田屋太兵衛、柳屋次郎兵衛、土佐屋権四郎、平野屋佐兵衛、平野屋市郎兵衛の五名であつた。このようにみると、両定芝居とも特定の同族によつて経営されてゐたことがわかる。

公許時の両芝居小屋の規模と構造はそれを示す同時代史料がないため不明であるが、元禄期の手鑑や享保期前後の芝居小屋絵図などの史料によつて窺ひ知ることができる。次に両芝居小屋の規模と構造について、これらの史料を中心に整理、考察していきたい。

『堺大絵図』、「道法り」、といった史料から、鑑町芝居の規模は東西表口十間半二尺六寸、裏入三十八間(朝尾氏の指摘によれば⁽²⁷⁾、このうち、裏入十五間分は建物前の「道」、すなわち広場であり、残り二十三間が芝居小屋であるという)、舞台三間四方、橋掛り長さ五間、下座一間、楽屋南北十間・東西九間半、見物場南北十間・東西八間、棧敷数二十三軒(各一間口宛)であつたことが確認できる⁽²⁸⁾。妙国寺本をみると、東西表口十一間(そのうち三間半預地)、楽屋南北四間・東西九間半となつてゐるほかは間数に異同はない⁽²⁹⁾。

同様に戎嶋芝居は『堺大絵図』、「道法り」に拠ると、東西表口十五間(ただし『堺大絵図』では十四間)・裏入

南北二十間、舞台三間四方（後が一間に二間）、橋掛り長さ六間、下座三間四方、楽屋二間半・十一間、物見場東西十一間半・南北八間、棧敷数二十五軒（各一間口宛）⁽³⁰⁾ あった。妙国寺本は見物場が東西十間半となっている以外は同様の間数である。しかし、専称寺蔵元禄六年（一六九三）「手鑑」（以下、専称寺本と略⁽³¹⁾）及び『堺市史』第五卷所収元禄八年（一六九五）「手鑑」（以下、堺市史本と略⁽³²⁾）は、東西表口十六間・裏入南北二十間、舞台三間・四間、橋掛り長さ六間・幅二間、下座三間四方、楽屋二間半・九間、物見場東西十間半・南北八間、棧敷二十五軒となっており、『堺大絵図』、「道法り」とは細部にわたって微妙に間数の異同がある。このことから『堺大絵図』、「道法り」及び妙国寺本と専称寺本及び堺市史本とは対象とした戎嶋芝居が違ったのではないかと思われる。

後述するが、戎嶋芝居は延宝八年（一六八〇）十月二十三日に楽屋裏から出火し炎上する。天和元年（一六八一）七月、戎嶋芝居と推測される「堺芝居」で「女舞停止」⁽³³⁾ されていることから、炎上後、まもなく再建されたようである。元禄八年「摂河境小鑑」によれば、

又刺吏佐久間氏御時元禄六酉ノ正月廿一日新舞台初芝居ニ相撲有終一日法楽⁽³⁴⁾とあり、元禄六年（一六九三）正月二十一日に新たに竣工した芝居小屋の初興行として、勧進相撲が行なわれたことがわかる。宝暦七年（一七五七）堺「手鑑」によると、元禄六年、「戎嶋芝居大破ニ付為修覆」の勧進相撲が許可されているが、これは右の興行をさす。初興行は新たに竣工した芝居小屋の再建費用回収の意味もあつたようである。

これらのことから、炎上後、まもなく再建されたとする戎嶋芝居は、仮設小屋であつたと考えられ、『堺大絵図』にある戎嶋芝居は炎上前か、あるいは仮設小屋をしめすものと推察できる。とすると、「道法り」及び妙国寺本は『堺大絵図』の示す間数と一致するため、炎上前か、あるいは仮設小屋の戎嶋芝居の間数をしめし、専称寺本及び堺市史本は、元禄六年正月二十一日に初興行を行なつた、新たに竣工した戎嶋芝居の間数をしめしているもの

と考えられる。

この両芝居については、現在、「鑑町芝居絵図」(図1-A)、「戎嶋芝居絵図」(図1-B)なる絵図の写しが伝存している。³⁶⁾その作成意図、作成年代などは無記載のため、詳細については不明である。藤田氏によれば、「享保十七年七月改堺井泉州手鑑案」に芝居絵図が添付してある旨の記載があり、この両芝居小屋絵図は、こうした「手鑑案」の添付図であったと考えられる。両芝居小屋絵図は、各部の寸法が元禄期の手鑑とは異なる点もあるが、藤田氏の指摘にあるように、³⁸⁾地割の状態が『堺大絵図』の描写とほぼ同様であり、舞台・木戸の形から判断しても、享保期から戎嶋芝居が戎嶋清水町から戎嶋伏見町に移転する宝暦四年(一七五四)十二月までに描かれたものと判断できる(鑑町芝居は安永九年(一七八〇)に移転)。そのため、この両芝居小屋絵図は公許時点の規模と構造そのままを描写しているわけではない。しかし、公許された場所での規模と構造は示していると言え、堺が「興行地」として成立する寛文延宝期から元禄期の定芝居の姿を窺い知ることができる。

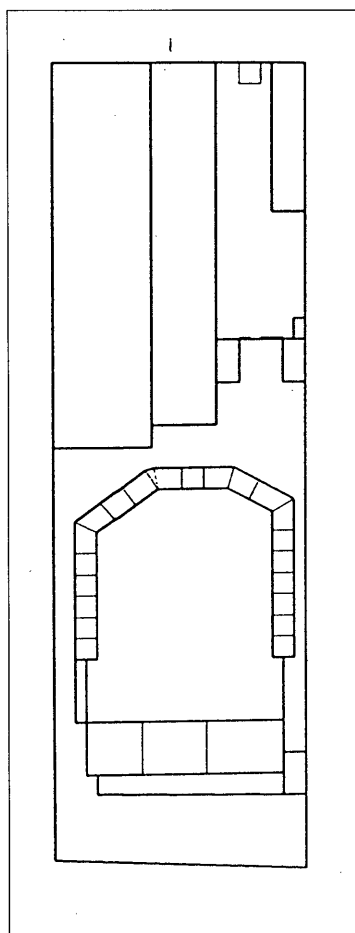


図1-A 鑑町芝居絵図
(『堺市史史料』所収、なお藤田実氏「元禄期上方歌舞伎の芝居小屋」『芸能史研究』一二九号より転載した

このように、

時代が少し下るといった史料の制約はあるが、両芝居小屋絵図は、先にみた元禄期の手鑑が示す芝居小屋の間数を視覚的にほ

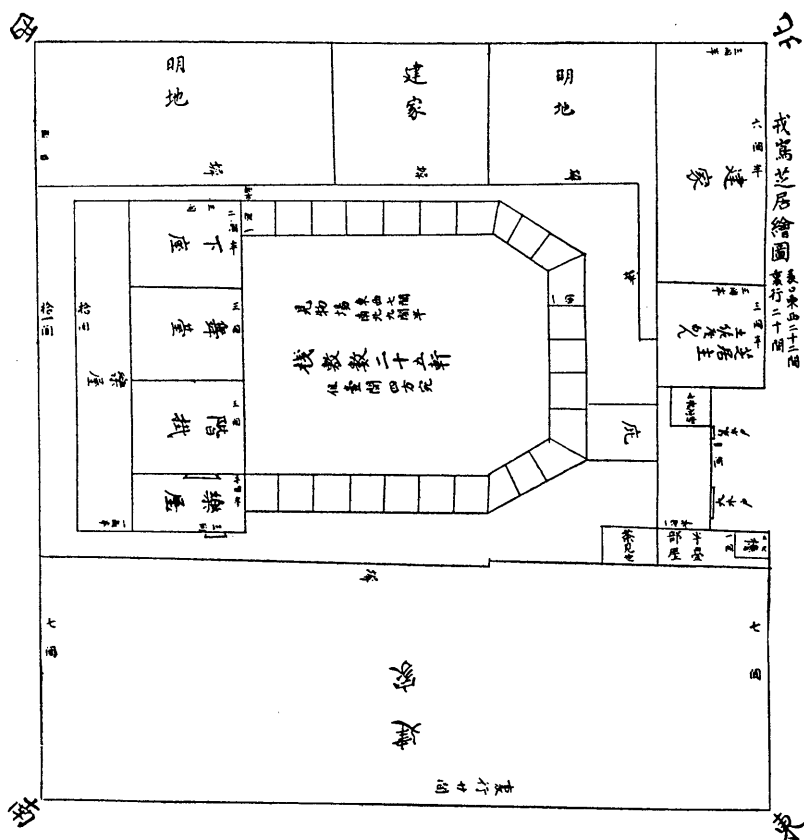


図1-B 戎嶋芝居繪圖（『堺市史』第三卷より転載）

ほぼ把握することができ、また手鑑には記載のない両芝居の構造を窺い知ることのできる史料である。特に戎嶋芝居小屋繪圖には詳細な説明が付されている。そこで、これらの繪圖などを用いて両芝居小屋について考察したい。この両芝居小屋繪圖を用いて、すでに藤田氏が元禄期の戎嶋芝居を推定・復元され、数多くの指摘をなされている。そのため重複する指摘もあり、屋台屋に架することとなるが、藤田氏が指摘されていない堺の「夜芝居」や相撲地取などを中心に再確認していきたい。

まず、繪圖によつて舞台まわりの位置関係が視角的に把握できることは注目できよう。繪圖

では戎嶋芝居の舞台まわりは舞台・橋懸・下座の三つから成り立っている。妙国寺本には「後」が記載されている。この「後」は藤田氏の指摘にあるように、能舞台の後座のようなものである⁽⁴⁾。この「後」は専称寺本、堺市史本には記載がない。そのため、「後」は新たに竣工した戎嶋芝居には設けられなかったといえよう。

さて、絵図が作成されたと考えられる享保期、すなわち、享保十八年（一七三三）に堺では「夜しばゐ」が興行されていた（注（61）参照）。両芝居のどちらで興行されたかは不明だが、おそらく鑑町芝居であろう（この点については後述する）。大坂では顔見世興行は夜芝居であった。そのため享保期堺において顔見世興行が行なわれていたことを示唆するものである。宝永元年（一七〇四）、大坂では失火の可能性から、顔見世興行を夜に行なうことは禁止された。京都については判然とはしないが、願い出て許可されれば興行は可能であったらしい⁽⁴⁾。堺についてはどうであったか判然とはしない。ただ、享保期に「夜しばゐ」が興行され、また先述した鑑町芝居顔見世番付によつて、明和安永期に鑑町芝居で顔見世興行が行われていたことが確認できるので、禁止されていなかった、あるいは許可制であったと考えられる。夜芝居は自然光を使用できないので、必然的に照明が使用されていたと考えられる。堺の芝居小屋の舞台装置がどのようなものであったのかを絵図より読み取ることができないが、京坂同様、上から照らすボーダークライト、下から照らすフットライトの二種を蠟燭や提灯などを組み合わせて使用していたのではないであろうか⁽⁴⁾。

次に注目できるのは「鼠木戸」の右手にある三間半四方の建家である。建家には「芝居主土佐屋かん」と記載があるが、藤田氏の指摘の通り、上方の芝居小屋に多くみられる「本家」であろう。「本家」とは上方でみられた小屋に接続するか、近傍にある芝居小屋主の持家で、多くは茶屋を経営していた。戎嶋「芝居主土佐屋かん」は、元禄期の戎嶋芝居小屋主である土佐屋妙休の同族であるとみなしてよいであろう。兩人とも女性とみてよい。戎嶋芝居小屋主は土佐屋のなかで、女性がなる慣習でもあったのであろうか。「土佐屋かん」は芝居小屋主であるので、

芝居小屋直営の芝居茶屋である本家茶屋の経営者でもあるが、元禄期の戎嶋芝居の芝居茶屋主のなかに土佐屋権四郎の名がみえる。他に両芝居関係者で土佐屋の同族と考えられる人物として、鍵町芝居の芝居小屋主で地主である土佐屋庄兵衛、土佐重兵衛、『堺大絵図』では戎嶋芝居の立地場所の掛屋數名義となっている土佐屋七郎衛門である。このようにみると、元禄期から宝暦期にかけて土佐屋一族が両定芝居に占めた位置は高かったといえる。

さて、この「本家」には「勘定場」が接続している。「勘定場」とは「銀主此処にきたつて其日の勘定を立」てるところであり、そのほか、「日々歩の割高」などを払う所でもあった。⁽⁴⁾ さて、「勘定場」横手に「鼠木戸」が設けられ、その反対側には「大木戸」があった。「大木戸」の方が幅が広くとられている。このため「大木戸」は出口に相当する「追出口」であつたのではないであらうか。

この「大木戸」の隣りに「半畳部屋」があり、その前方上部に櫓があつた。「半畳部屋」の隣りに「茶見世」がある。この「茶見世」は芝居小屋内部の位置から、三都の芝居小屋という内茶屋であり、ここで昆布やみかん、番付その他のものを売買していたのであらう。⁽⁵⁾

見物場である人溜は三都の芝居小屋のものと比較しても、割合広めにとられている。延享寛延期に両芝居では、堺の相撲部屋が相撲地取を行なっている。相撲地取とは力士が各自の所属する相撲部屋で行なう稽古のことをさす。延享五年（一七四八）に甲斐町浜堺屋元七が戎嶋芝居で、相撲頭取荒波岩右衛門が寛延二年（一七四九）、同三年（一七五〇）、同じく相撲頭取明石和田之介が寛延三年、同四年（一七五一）相撲取玉井友五郎らが鑑町芝居で相撲地取を行なっている。⁽⁶⁾ 芝居小屋で相撲の稽古をするとなると、具体的にどこで稽古したのであらうか。稽古する場所を考慮すれば、人溜であつたであらう。ということは、両芝居の人溜は、少なくとも寛延期には仕切柵の柵席にはなつていなかったといえよう。

棧敷については、両芝居の左右棧敷ともに向棧敷の方に回り込み、U字形になっている。おそらくこのような構

造は、元禄期の堺両芝居もとつていたものと思われる⁽⁴⁷⁾。

では、この芝居小屋の定員数はいかほどのものであつたのであろうか。藤田氏の推定によると、元禄期の戎嶋芝居の見物場の広さは八十六坪弱であり、仮に一坪十人の割で入つたと計算すると八百八十人、棧敷を各七人詰とみれば、合わして九百人前後、二階棧敷を想定すると千百人強であつたといふ⁽⁴⁸⁾。鑑町芝居は例外的な構造をとつてゐるが、戎嶋芝居とさほど変わらぬ坪数であることから、同等の定員数であつたといえよう。両芝居小屋、特に戎嶋芝居は京坂の芝居小屋と何ら遜色ない規模の芝居小屋であつた。

堺では京坂の芝居小屋と何ら遜色ない規模の芝居小屋を建築したといえるが、換言すれば、これだけの規模の芝居小屋が興行し経営されているということは、それだけの採算が見越せた、つまり堺では興行開始当初より、すでに一定の観客動員があつたと考えられる。堺は伊勢や宮嶋、金比羅といつた門前町でもなければ、浜之市のように大規模な市が立つわけでもない。にも関わらず、これだけの規模の芝居小屋が経営されていることは注目できであらう。

堺での興行を支えた観客について、その観客動員や観劇人口がどれほどのものであつたかについては、いまのところ類推するしか手はない。当然、堺市中とその周辺の人々が観客人口の主流であつたことは間違いない。そのほかに、興行内容によつては約四里の距離にある大坂よりも、人々は頻繁に観劇に訪れたであらう。

さらに、堺港に入港した人々や日待ちなどで「滞船」している人々が観客動員の一翼を担つたと想定できるであらう。伊勢や金比羅、宮嶋、浜之市といった「興行地」は、「興行地」であるまえに門前町あるいは市であり、そのような都市の個性が「興行地」の観劇人口、観客動員といった集客能力に反映され、時に「興行地」の環境を規定した。堺は貿易港としての価値は著しく低下させてはいたが、基本的には港湾都市であり、そのような都市としての個性が興行上の個性に反映されていたと考えるべきであらう。時期はかなり下るため問題はあるが、天保十

三年（一八四二）八月に堺奉行が大坂城代に宛てた伺書のなかで、堺の興行には「船着之儀滞船之ものとも又者他国方も見物人」が「入込」むと述べている。⁽⁴⁹⁾堺の興行界は堺港という集客能力を通じての観客動員を見込んでいたとみてよい。

また観客動員の一助として遊里の存在は見逃せない。堺では前代より発達していた遊里が都市の一形相として成立し、全国的に有数の遊里であつた。それは遊女が心中立てをする七か所のひとつに数えられていることや『好色一代男』巻五で三十九歳の世之介が京の太鼓持たちと堺の廓で遊んだ時の様子が生き生きと描かれていることなどからも窺える。⁽⁵¹⁾

堺には二つの廓が南北に存在した。すなわち南郷南高須町の乳守廓（津守廓）、北郷北高須町の高須廓である。

西鶴の作品にはしばしば乳守廓やそれにまつわる逸話が登場するが、彼自身、大坂表の役者連中と乳守廓で遊んでいる。⁽⁵²⁾また、五月二十八日に行なわる住吉大社の御田植には、堺の遊女が早乙女として「色々のかたびらに衣裏ざしして出たち、うつくしき帯など手すきにかけつゝ、田面におりたち、早苗をとりてうたへ」⁽⁵³⁾たという。

延宝六年（一六七八）段階で、乳守廓は女郎屋三十五軒・揚屋十軒、高須廓は女郎屋二十五軒・揚屋三軒でそれぞれ営業していた。遊里に近似した遊享施設である風呂屋・湯屋は、元禄六年、戎嶋清水町に公許され営業していた。戎嶋清水町は戎嶋芝居のある町であり、元禄六年は芝居小屋が新築した年である。新舞台竣工に合わせた遊享施設の整備であつたのであろうか。また同年、町の不繁昌を理由に北郷海船町、蛤町に対し、その町方助成として風呂屋・湯屋の設置が許可されている。⁽⁵⁴⁾

宝暦七年（一七五七）段階では乳守廓の女郎屋は九軒、揚屋十二軒、高須廓が八軒、揚屋については四軒であつた。両廓とも、かなり衰微しているが、これは戎嶋にあつた茶屋の繁昌（宝暦七年段階で市中の茶屋三十九軒の内、二十九軒が戎嶋に存在した）と関係があるであらう。文化七年（一八一〇）には乳守廓の女郎屋は二十三軒、揚屋

八軒、高須廓は女郎屋二十一軒・揚屋八軒とその勢いを取り戻しているが、これは寛政十一年（一七九九）に市中に散在する秘娼、私娼を両廓に集めたためである。⁽⁵⁶⁾これは逆に市中にかなりの数の秘娼、私娼が存在したことを示唆する。

堺では中ノ町、袋町が非公許の廓町であった。早く天和元年にはその営業が停止されるなどしており、早い時期から営業し、相当の私娼が存在したようである。⁽⁵⁶⁾また元禄四年（一六九一）五月に塩浜、宿院、稻荷、戎嶋以外での揚弓場の営業が禁止されていたり、同八年（一六九五）二月、湊出島の二軒の茶屋が秘娼を置いていたことが露見し営業停止処分を受けている。⁽⁵⁷⁾堺には秘娼、私娼は潜在的に広範囲かつ多数存在したようである。

天保十三年八月、天保改革の風俗取締りの一環として両廓は新地に移転させられ、その後、移転地の新地栄橋町、住吉町を中心に繁昌した。

総じて堺の遊里は上級の遊女が少なく、また上質の遊里ではなかった。そのためか、堺の「口きく程の若き人」は、堺では遊ばず「新町に手あひを拵え」るか、あるいは小遣いを「ためて置いて、一度に。嶋原で。遣ひ捨る事」ことを念願したという。⁽⁵⁸⁾しかしその分、揚代も安く、しかも秘娼、私娼も数多くおり「田舎の人」、すなわち堺港に入港した人々や日和待ちのため「滞船」している人々、堺周辺の在村などの人々にとっては「適々の遊興」には申し分ない遊び場であった。このような遊里の存在は、人々を堺に引き寄せ、また引き止める役目を果たし、芝居小屋の観客動員の一助となったであろう。

2 定芝居公許の背景

右にみてきたように、堺では寛文延宝期から元禄末期にかけて、芝居小屋や茶屋などが集中的に公許され、「興

行地」堺成立の契機となった。そして少なくとも元禄期までには、興行慣行や機構を整備し「興行地」として成立したといえる。

堺で二軒の定芝居が公許された寛文延宝期は、堺のみならず三都においても芝居小屋をはじめとした遊興施設が整備されていった時期である。この時期は近世芸能史の上からも、近世史の展開の上からも看過できない時期であることは、すでに諸先学によって考察されているところである。特に守屋毅氏は、この時期を近世芸能興行の慣行成立時期と想定されている⁽⁵⁹⁾。その背景に幕府の政治動向があるのは守屋氏の指摘をまつまでもない。

寛文延宝期は幕府の全国的遠国支配機構の再編成期であり、畿内においても「上方八人衆」体制が崩壊ないし変容している⁽⁶⁰⁾。堺では和泉国奉行として「上方八人衆」体制の一翼を担い、父勝政と二代にわたって堺奉行として活躍した石河利政が堺奉行を退任した寛文四年（一六六四）を機に堺奉行の政治的範囲と広範な権限は縮小していく。そして元禄九年（一六九六）には綱吉政権下で伏見奉行とともに廃止され、六年後の同十五年（一七〇二）に再設置をみるが、完全に都市支配専担の「町奉行」的性格に位置けられた。

さらにこの時期、堺はそれまでの全国的経済拠点としての地位を大坂に奪われ、経済的地盤沈下が進みつつあった。加えて、市中を縦貫する高野街道は地域の生活道路としては重要であったが、全国的視野からすれば、わずかに南海に向かう一支線であり、交通上も重要性を失っていた。当然のことながら、このような政治、社会経済的動向は、これまでの堺に対する諸政策に変化を生じさせたものと考えられ、寛文延宝期から元禄末期にかけて芝居小屋や茶屋の公許が集中的に行われたことと不可分の関係であることを示唆するものであろう。

二軒の定芝居公許は、定芝居を公許し公的な保証を与えるかわりに興行の「場」を特定・限定し、興行の掌握・管理を容易ならしめようとし、さらに公的な保証を与えることによって安定した興行を継続させ、その経済的波及効果を経済的地盤沈下が進行しつつあった堺経済への刺激剤的役割としようとする意図があったのではないであらう。

表1. 銚町芝居・戎嶋芝居移転年表稿

銚 町 芝 居		戎 嶋 芝 居	
寛文10・08・10	銚町において公許	寛文08・08・10	戎嶋芝居興行開始カ
		延宝05・12	戎嶋芝居小屋建設
		06・01	戎嶋清水町において公許
		08・10・23	戎嶋芝居、放火により炎上
		↑	
		(この間、仮小屋での興行カ)	
		↓	
		元禄06・01・21	新舞台初狂言
安永09・10	銚町芝居大破・休櫓願出	宝暦04・12	戎嶋清水町より同伏見町に芝居小屋移転
		11・21	大寺(現、開口神社)境内に芝居小屋移転・櫓免許移転 大寺芝居となる
		明和01	川端町に芝居小屋移転
		寛政11・05	車之町浜に芝居小屋移転
		12・閏4	戎嶋新橋町において、芝居小屋棟上げ、赤飯を配る
		12・05	戎嶋新橋町に芝居小屋移転完了、まもなく大破・休櫓願出
		文化04・閏6・05	宿院(住吉大社御旅所)に櫓免許移転 芝居小屋移転、宿院芝居となる
		天保07・10	新地龍神町に芝居小屋移転、棟上げ、櫓免許移転移転 新地芝居となる
		08・03	新地芝居初舞台
14・11～		14・04～10	新地横町に移転 新地北芝居となる
15・02			
	大寺境内より新地北芝居西側に移転、新地南芝居		

(典 拠)

- 「摂河境小鑑」 (『堺市史史料』 総説一 堺市立中央図書館蔵)
「堺御手鑑諸法道法り」 (『堺市史史料』 幕政十四 堺市立中央図書館蔵)
「手鑑抄」 (『堺市史史料』 幕政十四 堺市立中央図書館蔵)
「堺鑑」 (『続々群書類集』 第八巻 地理部)
「元禄六年堺『手鑑』」 (『堺市史史料』 幕政九 堺市立中央図書館蔵)
「元禄八年堺『手鑑』」 (『堺市史』 第五巻 資料編第二)
「元禄十七年堺『手鑑』」 (『堺市史史料』 幕政十 堺市立中央図書館蔵)
「文化十年堺『手鑑』」 (『堺市史』 第五巻 資料編第二)
「享和後珍記」 (『大谷女子大学資料館報告書』 第二十六冊)
「老圃歴史」 五 (『堺研究』 一三号)
「天保選要類集」 芝居之部 (『旧幕府引継書』 国立国会図書館蔵)
『堺市史』 第三巻
拙稿「天保改改革令と堺の歌舞伎芝居」(『芸能史研究』 140号、一九九八年)

※なお、上記拙稿所収表を加筆修正した。

うか。

二 定芝居の移転とその変遷

1 鑑町芝居から大寺芝居へ

先に考察したように、堺では寛文延宝期に鑑町・戎嶋両芝居が公許され、それを契機として少なくとも元禄末期までには「興行地」として成立したと考えられる。当初、鑑町・戎嶋両芝居は市中の外縁部に位置していたが、表一をみてもわかるようにそれぞれ移転する。特に戎嶋芝居が移転を繰り返している。

以下、本章では両芝居の移転場所やその時期などをそれぞれ天保改革まで整理し、それによって浮かび上がってくる問題について考察していきたい。

鑑町芝居は、番付が現在、年月日不明（但し、明和元年から安永九年の間の興行と推定できる）の顔見世番付が一枚伝存しているのみであり、その他の史料についても伝存は僅少であるため、興行状況について把握するのはすこぶる困難である。しかし、右番付から、また安永九年（一七八〇）まで「大破休櫓願」が出されていない点を考慮し、公許以来、興行は継続していたと考えられる。

享保末年の役者評判記に、堺の興行に出勤した京坂の大芝居の役者の評が散見する。すなわち、享保十八年（一七三三）十月、山下京四郎は「堺の夜しばる」の座本を勤め「お手がら」という評価を得ている⁽⁶¹⁾。この興行には杉本勘左衛門も出勤し「序をつとめなされ」たが「八日めより御病氣とて引込んで」いる⁽⁶²⁾。さらに享保十九年（一七三四）「十月廿四日」には「南端舞台町のしばる」つまり鍵町芝居において、山本京四郎が「山升大夫五人娘の狂言に、山岡二成ての大典」りをとり「堺中が打おこつて大入、銭の取あきなさるゝ」といった盛況であった⁽⁶³⁾。山本

京四郎の興行は鑑町芝居であることは確かであるが、山下京四郎の「夜しばる」興行が鑑町芝居、戎嶋芝居のどちらで興行されたかは判然とはしない。ただ今のところ、三都の出版物には鑑町芝居しか登場しないことから、鑑町芝居であつたと考えてよいであろう。

享保期の上方歌舞伎は、芸態や作品などの面で過渡的な時期であり、興行的には享保の改革の影響によつて不景氣であり、停滞の時代であつた。⁽⁶⁴⁾ 男伊達風の演技で人氣を得た姉川新四郎は「二三年は尻もためず、稲光のごとく、難波でちらく、京でちらくとなされ、ふみしめてもなされぬ人」と評されたが、「一年たゝぬ中に、尻がるに所をかへらるゝ」は、何も姉川新四郎だけではなく、「京の方にも、顔見世に出、春伊勢へ行く人もあり、二のかはりから、むかひのしばる」⁽⁶⁵⁾へ出勤する役者達もいたという。この時代の代表的女方、萩野八重桐も「有馬筆同前に、出たり入ツたり氣は定まらず、奈良へいたり、堺へすんだり、尾張にゐたり」⁽⁶⁶⁾していた。このような原因は「近年芝居不景氣にて大夫本が立消えしたり、契約の肝心の物がこなんだり」⁽⁶⁷⁾したからである。諏訪春雄氏や東晴美氏の指摘によると、享保十一年（一七二六）に京佐野川座、大坂萩野座、享保十五年（一七三〇）大坂浅尾座、享保十六年（一七三一）大坂山木座がそれぞれ休座し、享保十四年（一七二九）大坂大西芝居は顔見世を行わなかつたなど、不景氣を原因として、座が立ち消えになるなどしている。

京坂興行界が不景氣であり、そのため座が立ち消えになったり、京坂の大芝居の役者が不安定な出勤を繰り返しているといった状況と享保末年の役者評判記に堺の興行への出勤記事があらわれたことは不可分の関係であるともみるべきであろう。享保改革による不景氣をかこつ京坂興行界にあつて、京坂よりもほど近く、その規模も京坂とほぼ同様の「興行地」堺は、京坂の大芝居の役者連中にとっては、京坂興行界の不景氣を補完する、何かと重宝な「興行地」であつたと推察できる。

さて、鑑町芝居は安永九年十月に大破・休櫓願いを堺奉行所に提出する。その理由については判然とはしない。

このおり、「芝居主之内」住吉屋六兵衛が「櫓借請」け大寺境内で「子供芝居」を興行したいと願ひ出た。堺奉行佐野備後守政親は、これを大坂城代牧野越中守貞長に「相伺」つた上、翌十一月二十一日にその願ひを許可した。⁽¹⁰⁾これにより櫓が大寺境内に移転し、以後、大寺芝居と称せられ興行が行われていく。

櫓と芝居小屋が移転した大寺は、もともとは塩土老翁、素盞鳴命、生国魂神をまつる開口神社で堺の総鎮守であり、同時に住吉大社の奥宮・別宮でもあった。天平十八年（七四六）行基が社内に念仏寺を創建し、大同元年（八〇六）には空海によつて宝塔が建立され大日如来が安置された。念仏寺はその後、行基伝承を組み入れていき、以後、堺の信仰の中心となつた。その後神仏習合が進み、開口神社は一般的に大念仏寺、略して念仏寺、通称大寺と称されるようになった（本稿は混乱を避けるため、大寺で統一する）。創建当初の位置については判然とはしないが、応仁の乱前後には市中のほぼ中央に寺地が移つたと考えられる。大寺は中世には和泉国守護細川氏や堺会合衆などから庇護をうけ、天正十四年（一五八六）、豊臣秀吉より築尾村内八十石を朱印地として寄進された。この寺領は江戸時代にも引き継がれる。大寺は大坂夏の陣で全焼したが、明暦元年（一六五五）に再造営され、寛文三年（一六六三）には三重塔、同時期に絵馬堂も建てられ復興する。⁽¹¹⁾以後、堺の信仰の中心として、そして遊樂の中心として栄えた。寛政八年（一七九六）版『和泉名所図絵』には、

当寺の封境、方壺町許にして、衆徒六坊、西座二坊あり、常に詣人間断なく、神の御前賑しく、買人の小店軒をならべ、軍書嘶の口拍子、操芝居、歌舞伎狂言の三弦、太鼓の音ゆゝしく、当津に於て、繁花の最一也⁽¹²⁾

とあり、大寺境内は大寺芝居の移転後、大寺芝居を中心に、堺市中でも、最も繁華な遊樂の場であつたことが窺える。大寺はこういった芝居興行だけではなく、諸国の出開帳の宿寺としても境内を提供していた。表二は大寺境内で行なわれた居出開帳を年表化したものである。年表をみると、居開帳は比較的少なく、諸国の寺院の出開帳が多く行なわれている。これら居出開帳は当然、大寺芝居が移転される前から、そして移転後も行なわれている。大寺

表2. 大寺境内における開帳年表稿

年 月 日	期 間	開帳寺社	開帳内容
享保08	03・02～04・08	居開帳	本尊千手観音、二階堂両祖真影。 文殊菩薩並びに宝物出開帳。「開帳大ニ賑ひ、別而在々并幟之寄進夥敷事」 観世音菩薩、靈宝。「春中天満大融寺開帳次手也」 「大坂出開帳方大寺来」 観世音菩薩 神宮皇后像並びに宝物。 白髪大明神並びに宝物。 雨天のため、05・25～06・17を期間とした。
宝暦11	03・03～	和州岡寺	
明和05・03・03	03・03～04・15	居開帳	
天明06・03・03	03・03～04・08	摂州勝尾寺	
享和04・02・03	02・03～03	泉州家原寺	
文化10・05・12	05～	濃州谷吸山観世音	観世音菩薩。 川上大明神並びに役行者、観世音菩薩。 本尊阿弥陀如来、齒吹如来、三社大明神、ぶんぶく茶釜。 毘沙門天。 観世音菩薩。 「大イニさぶしき」 「大坂戻り開帳」、「大ニはゾミ」 「日のべ、大寺金ひら堂南側引也」 「庚申様開帳」 「毘沙門天当り年開帳」 「薬師如来開帳」
12・05・01	05・05～6・19	河州葛井寺	
12	—	河州葛井寺	
文政03・03・03	—	居開帳カ	
・05・16	05・16～06・08	居開帳	
07・03・03	—	河州観心寺	
13・05・10	37日間	和州壺坂寺	
天保04・03・04	—	和州川上大明神	
06・05・18	—	上州称念寺	
10・03	03～	和州信貴山	
11・03・16	60日間	和州長谷寺	
嘉永04	—	北野天神社	
安政03・04・18	37日間	河州葛井寺	
04・03・04	03・08～04・21	栄久寺上条院	
万延01・04	04～	居開帳	
慶応02・03	—	居開帳	
04・03・12	—	居開帳	

(典拠)

『開口神社史料』、『年代記』、『享和後珍記』、『老圃歴史』、『堺市史史料』

(参考資料). 大寺境内砂持ち年表稿

年 月 日	期 間	内 容
文化05・01・22	05・10～05・29	絵馬堂新規建立につき
10	—	絵馬堂
09・05・12	05・12～06・02	「三村宮（大寺）新始、十二日〆砂持、追々繁昌日延」 「大寺本社砂持、南ノ庄ねり物たし多出ス」
文政05・04・23	—	大寺鐘樓堂引直し修覆のため。「賑ひ候事」

(典拠)

『開口神社史料』、『享和後珍記』、『老圃歴史』、『堺市史史料』

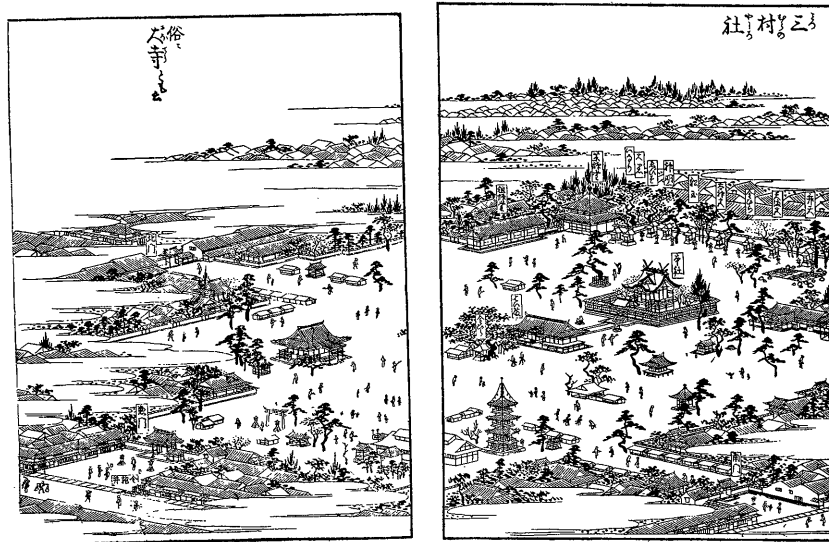


図2 大寺境内図（『寛政八年刊和泉名所図絵』、柳原書店、一九七六年）

芝居が興行している時に、一方で開帳が行なわれた場合もあったようである。まさしく大寺は市中随一の遊樂の場であった。

これまで『堺市史』第三巻をはじめとして、諸書では大寺芝居の位置を大寺境内とするのみで漠然としか指摘していない。境内のどこに芝居小屋が位置していたかを特定することは、本稿の主旨からも、また近年、開帳開催をはじめとした遊樂の場としての寺社境内の分析や寺社境内の利用方法などの研究が進展しているなか、重要な問題点と考える^②。そこで、境内での大寺芝居の位置を確定しよう。

寛政八年刊『和泉名所図絵』には大寺境内が描かれているが、三重塔の西側に櫓と梵天らしきものがあがった小屋を見出だすことができる（図2）。この小屋は時期やその描写から大寺芝居であると考えられる^③。

「老圃歴史」享和三年（一八〇三）条に、大寺境内芝居今度西門脇北側二建、食堂跡也、是迄塔西際二有、始メ住六小屋芝居也、矢倉ハ

安永中南鍵丁芝居ヨリ引之⁽⁷⁵⁾

とあり、安永九年に鑑町芝居が大寺境内に移転した位置は「塔西際」で、その後、享和三年になって「西門脇北側」に再度移転したことがわかる。『和泉名所図絵』挿絵の三重塔の西側に描かれている小屋は、「西門脇北側」に移転する前の大寺芝居小屋を描いたものであったことが、これで判明する。

次に大寺芝居が「塔西際」より「西門脇北側」に移転したいきさつについて整理しよう。⁽⁷⁶⁾

享和元年（一八〇三）、食堂跡である「西門脇北側」にあった南組惣会所が「引払」われ、市町上浜に新築された。それを契機に、大寺芝居側では、芝居小屋が「塔西際二有」と何かと「差障」があるので、この南組惣会所跡に芝居小屋を「引直」そうとした。しかし、隣接する甲斐山口町が「御町内会所ニ隣宅之儀ニ付、御不承知」と反対したため移転は難航したが、大寺芝居側は「何分場所も無之見越等之儀無之様仕可申、尚又御町内差支無之」ようにするので了承してくれるよう「一向御願申入」れた。そこで甲斐山口町も「厚御了簡」し移転を承諾した。その結果、享和三年に「塔西際」から「西門脇北側」、すなわち西門（惣門）入って左側に芝居小屋を移転することができた。これ以降、この大寺芝居小屋は「西門脇北側」に固定し、以後、三代目中村歌右衛門をはじめとした大坂の役者連中などが出勤し、盛んに興行が行われていく。

右のように、甲斐山口町を説得して三重塔の西側から「西門脇北側」に移転した大寺芝居であったが、文化八年（一八一）に大寺芝居関係者の素行等で甲斐山口町と問題をおこし、大寺芝居側は芝居主辰野善兵衛、代綿屋新兵衛、名代大和屋藤兵衛、遠方惣代大和屋忠兵衛連名で、甲斐山口町河内屋作左衛門と町中宛てに託証文をいれている。そのなかで四点にわたって改善点を申し入れた。

- ① 芝居興行中は喧嘩口論などないようにし、決して町内には迷惑はかけない。仮に発生した時は諸費などの一切は大寺芝居側が負担する

② 芝居興行を行うにあたっては、大寺年預に願い出、それが済んだ上で町内年寄をはじめ町衆へ断りをいれる。
③ 顔見世興行等のおり、町内の提灯などに灯を点す時は町内へ申入れ、その指図に従う。

④ 興行中、芝居主、名代をはじめ「表方雇之もの」まで町内に「かさつけ間敷」ことや「不敵」なことはないよう申付ける。

右の四点のうち、①④は一般的な事項であり、注目できるのは②③である。②は一部分ではあるが、大寺芝居の興行慣行に触れている。大寺芝居の興行慣行については史料的に判然とはしないため注目できる。寺社境内にある定芝居という特性であろうか、興行の際、大寺年預の許可を必要としていた。文化八年以降は大寺年預の許可の後、甲斐山口町に連絡をいれることとなっている。大寺芝居は寺社境内にある定芝居であるため、興行許可ルートもそれまでの定芝居とは違ったものであったと考えられる。

大寺・宿院両境内にほど近い常楽寺天神社では境内で寺内軍書、辻打能、小芝居などが興行されていた。安永六年（一七七七）十二月の常楽寺天神社に対する定書に、

一、寺内軍書、辻打能、小芝居等相願候ハ、役人及役僧へ申達、役僧より年頭へ相願、間届之上、芝居主方願書一札取遣可申候^㉒

とあり、境内で「寺内軍書、辻打能、小芝居等」を興行する場合、興行主が奉行所に興行願いを提出し、それを受けた奉行所役人は常楽寺天神社役僧に連絡し、天神社年頭がその願いを受理した上で芝居小屋主より願書を取り奉行所に提出することとなっていたことがわかる。常楽寺天神社における興行慣行、許可ルートをしめすものである。寺社境内に立地している点と同様であるが、右史料は時期が多少ずれ、しかも同社境内での興行は非常設・非常時の仮設興行であり、定芝居である大寺芝居とは性格を異とする。そのため、常楽寺天神社の興行許可ルートがそのまま大寺芝居にあてはまるわけではないが、大寺芝居にしても芝居小屋が立地している大寺の許可は必要であった

ので、参考にはなろう。

次に③は、大寺芝居において顔見世興行が行なわれ、そのおり、近辺の町内より提灯が出されていたことを示している。先述したように、堺では享保年間には顔見世興行が行なわれていたようであるが、その前後の時期に行なわれていたのかについては判然とはしない。現在、大寺芝居での顔見世興行が史料的に確認できるのは、文政頃と推定される年不明の顔見世番付一点のみである。⁽⁷⁶⁾ 顔見世興行であつたかは定かではないが、文政十三年十一月にも興行が行われている。⁽⁷⁹⁾ おそらく顔見世興行であつたであろう。堺の顔見世興行が、いわゆる顔見世興行、すなわち年間興行の出発点であり、年間を通しての座付役者を臈肩に披露するといった興行ではなく、あくまで形式的なものであつたのはいうまでもない。しかし、近辺町内より提灯を出し、その提灯によつて大寺芝居を飾り立てることは、顔見世興行が堺の人々にとつて祝祭するべき特定の興行であり、特別な意味をもっていたものと思われる。

堺奉行所寺社方与力木造某氏が文政十三年（一八三〇）から天保三年（一八三二）頃までの職務の掌控として作成したと推定できる「寺社方書留」をみると、大寺が堺奉行所寺社方に「芝居二而、奉納舞浚願」いを提出している。⁽⁸⁰⁾ これは、大寺が大寺芝居小屋において「奉納舞」のおさらいを行なうことへの許可を願ひ出ていると考えられるが、わざわざ芝居小屋で「奉納舞」の稽古を行なうことは注目できよう。この「奉納舞」については詳細は不明だが、歌舞伎芝居興行では正月三ヶ日と顔見世興行の初日から三日間、儀式として「翁渡し式三番叟」が演じられた。⁽⁸¹⁾ 単に場所の問題であつたかもしれないが、この「奉納舞」は大寺が大寺芝居小屋でわざわざ稽古していることをみると、大寺芝居の正月三ヶ日と顔見世興行の儀式としての、特に顔見世興行に対する「奉納舞」であつたのではないであらうか。だとすると、大寺は単に大寺芝居に境内の一部を提供しているだけではなく、大寺芝居にとつての重要な儀式を担い、その興行慣行の一翼を担っていたといえよう。

さて、大寺と大寺芝居は近世演劇史上、堺の一寺院であり、その境内にあつた芝居小屋というだけではなく、歌

舞伎狂言の外題や歌舞伎狂言の舞台としても登場する。

初代坂田藤十郎は元禄四年（二六九二）大坂岩井座で『堺大寺開帳』を出している⁽⁸²⁾。この狂言は御家騒動物のひとつで、藤十郎得意の傾城買いを導入していたと推測される狂言である。二代目坂田藤十郎は宝永八年（一七一）に京布袋座で『堺大寺開帳』を「けいせい二代男」と改題して上演している⁽⁸⁴⁾。

さて、「おっしやりますな、お梶さん」で有名な並木正三作「宿無団七時雨傘」は明和五年（一七六八）七月に大坂竹田芝居で初演された、大坂の市井に生きる人々たちの姿を活写した上方世話物の傑作である。現在でも上演される狂言であるが、青木繁氏の指摘によれば、現在も上演されている上方狂言の演出や演技などの伝承は、遡ってもだいたい寛政期までであり、この狂言の場割り、すなわち「堺魚市」「同大寺芝居」「岩井風呂」「並木正三」も寛政二年（一七九〇）四月角の芝居上演を絵入根本としているという⁽⁸⁵⁾。さらに青木氏はこの狂言もおそらく初演時と寛政二年四月角の芝居の上演ではかなり内容に相違があるのではないかと、とも言及されている⁽⁸⁶⁾。確かに初演時の明和五年にはまだ大寺境内に大寺芝居は存在しない。このことから初演時と寛政期では場割り名は違ったと考えられ、大道具や小道具の出道具、演出面などでかなり相違があったものと推測される。

では、初演の明和五年から寛政二年までは、序幕の返しである、言わゆる「芝居前」はこの芝居小屋であったのであろうか。初演の絵本番付には場割りの記載はなく、また残念ながら、今のところ初演時の台帳も不明であるため、この点、判然とはしない。作者である正三が具体的に堺の芝居小屋を念頭においていたかどうか、それも判然とはしない。狂言のなかでは、芝居小屋を表現すればよいのであって、具体的に実存する芝居小屋を設定し再現する必要はない。しかし、京坂と堺との地理的な距離、京坂の「興行地」堺への認知度からすれば、そう嘘を書けたとも、また書いたとも考えられない。序幕は「堺魚市」でその返しが「芝居前」であり、魚市と芝居小屋との地理的関係を連想させる。序幕「堺魚市」は堺の魚市のうち、戎嶋の魚市を舞台としている。戎嶋芝居は宝暦四年に

移転しているため、初演時には戎嶋にはないものの（初演時は川端町）移転前は戎嶋にあり、地理的關係は連想できよう。鑑町芝居は南郷鑑町の飛地に位置していたが、南郷の魚市である紺屋町浜とは地理的に近隣である。このように序幕は堺の魚市と芝居小屋の位置關係が投影されているように思われる。

現在、刊行されている『宿無団七時雨傘』の序幕「堺魚市」の台詞のなかに興味深いものがある。⁽⁸⁾

高橋数右衛門、万力市右衛門、親方権兵衛との会話で、

数右　なんと万力、魚市と云うものは、賑やかなものではないかい。

万力　イヤモウ、大坂に居て雑魚場の市は見ましたが、それよりは又、二層倍やかましいものでござります。

権兵　わしは又、戎嶋に居りまして常住見て居りますに依つて、なんともござりませぬ。今度、角の芝居が南へ来たのは、お真向き様のやうに思うて、見たうござります。

この会話のなかで、親方権兵衛が「角の芝居が南へ来た」と言っているのには興味深い。この角の芝居は虚構の引越興行であるのは当然だが、その虚構の引越興行が興行された「南」が序幕の返しの「芝居前」に相当する。当然、この台詞も寛政期以降のものと考えられるが、この「南」が大寺芝居を指しているとは理解しにくい。大寺芝居であるなら、「大寺」あるいは「大寺芝居」と表現したであろう。鑑町芝居は「南」郷にあり、また「堺南の端芝居」、「堺南端舞台町芝居」などとも称されている。そのため台詞にある「南」は鑑町芝居であつたのではないであろうか。しかしそれでは辻褄があわなくなる。これは寛政期以降、序幕の返しは「大寺芝居前」となり、「大寺」あるいは「大寺芝居」と台詞が改められるところが、寛政期以前の台詞が改められることなく、「今度、角の芝居が南へ来た」という台詞が残存してしまつたのではないであろうか。これらのことから、初演の明和五年から寛政二年までの序幕の返しの「芝居前」は鑑町芝居を想定していたのではないかと考えられる。

さて、堺を舞台としているこの狂言であるが、堺においては驚くほどに上演されていない。今のところ管見の

ぎり、四回しか確認できていない。堺での初演は文化十三年七月（一八一六）宿院芝居での上演で、団七茂兵衛に三代目中村歌右衛門、女郎とみに初代中山よしを、並木正三が七代目片岡仁左衛門、岩井風呂呂治介に市川鯉十郎であつた。⁽⁸⁹⁾ その次が嘉永四年（一八五二）大寺芝居の後身である新地南芝居で興行され、団七茂兵衛が市川条藏、女郎とみに市川延之丞、並木正三が尾上鶴松、岩井風呂呂治介に市川己之助であつた。⁽⁹¹⁾ 三回目が慶応元年（一八六五）六月、説教小屋として再スタートしていた大寺芝居で、⁽⁹²⁾ 団七茂兵衛に尾上豊松、女郎とみに市川枅之助、並木正三が市川団治、岩井風呂呂治介に実川延寿であつた。⁽⁹³⁾ 最後が翌同二年（一八六六）六月新地北芝居において、この時の役割は団七茂兵衛に中村眼玉、女郎とみに市川右団治、並木正三が嵐寿珏、岩井風呂呂治介に中村芝雀であつた。⁽⁹⁵⁾ 何故、堺での上演が少なかったのかは定かではない。⁽⁹⁶⁾

右でみてきたように、鑑町芝居は安永九年に休櫓となり、同年に櫓が大寺境内の大寺芝居に移転した。大寺芝居は、寛政期には三都にも知られる芝居小屋となり、文政期にはその興行が看過できないものになるほどに成長していた。以後、大寺芝居は天保改革の取締まりにより、新地に移転するまで、堺における遊楽の場を中心として繁盛していく。

それでは、次にもうひとつの定芝居である戎嶋芝居の移転状況について整理していこう。

2 戎嶋芝居から宿院芝居へ

表一をみてもわかるように、戎嶋芝居は度々移転を繰り返している。これは鑑町芝居とは違い、芝居小屋主と地主が同一人物ではなかったこと、発展しつつあった新開地戎嶋にあったことが要因にあげられるであろう。

戎嶋芝居は公許された三年後の延宝八年十月二十三日、押し入った「盗人」によって「芝居のうしろ」、おそら

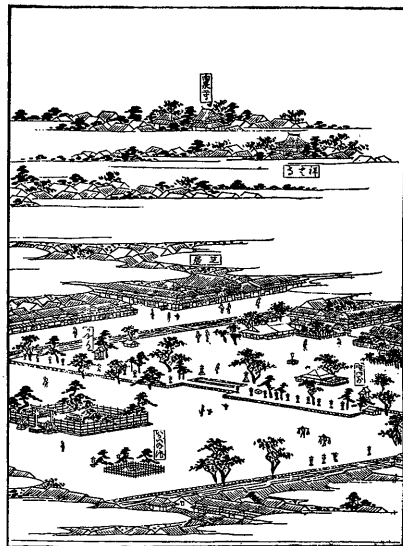
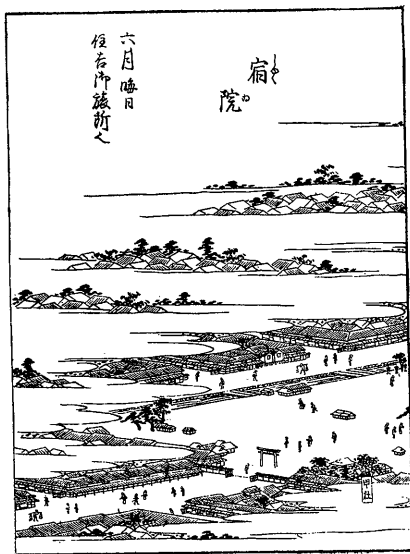


図3 宿院境内図（『寛政八年刊和泉名所図絵』、柳原書店、一九七六年）

く楽屋に放火され炎上する。この火災は「堀を打越へ堺の浜側に火」がうつり、おりしもこの日「西風がはけし」かったために「其火ひんかしの土居まで焼けぬ」け、「御政所（町奉行所、筆者注）をはしめ奉り、武家屋敷ミナ焼失⁹⁷」した。この火災は大坂夏の陣以来の大火となり、焼失町数十六町、焼失家屋数四七二軒を数え、堺市中を東西に「やけぬけ」る大惨事となった。戎嶋芝居はまもなく復興したようであるが、元禄六年正月二十一日に新舞台で初舞台が行われているところを見ると、それまでは仮小屋での興行であつたらしい。その詳細と新たに竣工された戎嶋芝居小屋の規模については先述したとおりである。

戎嶋芝居はその後「大破」し「芝居主共」の願により、宝暦四年（一七五四）十二月、戎嶋清水町から戎嶋伏見町に、続いて明和元年（一七六四）川端町「宿院山側」に移転する。⁹⁸寛政八年版『和泉名所図絵』には宿院境内が描かれている。そのなかに境内に隣接する川端町の戎嶋芝居小屋も描かれてい

る(図3)。

明和三年(一七六六)十二月五日座本中村亀菊、初代中村歌右衛門、中村吉右衛門、三代目嵐小六、二代目山下金作らの出勤で「年暮松竹梅」を興行している。『池田文庫所蔵芝居番付目録2』では、この興行を宿院芝居と推定されているが、この興行は『和泉名所図絵』に描かれた川端町の戎嶋芝居小屋で行われたものである。

川端町に立地していた戎嶋芝居は、寛政十一年五月(一七九九)車之町浜に移転する。しかし翌十二年(一七八〇)閏四月には戎嶋新橋町に移転し「棟上」げが行われ、その祝いに「赤飯」が配れている。翌五月に「引直」の願書を堺奉行所に提出しており、この移転はどうやら事後承諾であつたようである。戎嶋新橋町に移転はしたものの、戎嶋芝居はその直後に「大破、休櫓」願いを堺奉行所に提出した。その具体的な理由は判然とはしない。その後、引き取り手がなかったが、以前、芝居小屋主のひとりであつた和泉屋清七が「櫓借受」け宿院境内で「子供芝居」を興行したいと願ひ出し、堺奉行は大坂城代松平能登守乗保へ「相伺」つた上、文化四年(一八〇七)閏六月五日に許可した。この許可により櫓は宿院境内に移転し、宿院芝居が誕生する。

戎嶋芝居が移転した宿院とは、住吉大社の御旅所である。市中のほぼ中央に位置し、南北六十間・東西八十四間の敷地を占め、西を正面として大鳥居を構え、境内中央「山ノ下」に端垣をめぐらして「住吉明神御旅所」としていた。この奥に名越岡と呼ぶふたつの小山があり、その「山ノ上二二社有」つた。北側に鹿島明神、南側に香取明神がそれぞれ祀られていた。そして、この小山の間から裏正面を出て東に出る道筋を「山ノ上」と称していた。

毎年六月晦日の御祓には(六月が小のときは二十九日、大であれば晦日)住吉大社より神輿の渡御があつた。夜には神輿は還御するが、この時、堺の「地人船長漁師の類」が「手毎に炬を点じ、神輿を新大和橋北爪まで送」つた。一方、「住吉の神人」や大坂の人々は新大和橋北爪まで「御迎挑灯として、侯屋敷船持の売人・水人掛取の輩、数千の挑灯を照し、列をして酒機嫌に声を揚げ、神輿を迎え」た。これを「住吉の火替」といい、西の宮や灘、兵

庫、須磨、明石、そして貝塚や和泉佐野の人々は、あたかも白昼のごとく照り光る火焰の行列を「的」にして神幸を拝したという⁽¹⁰⁾。

さて、宿院境内のどこに宿院芝居があったかについては今のところ明確ではない。宿院芝居は天保七年（一八三六）九月前後に新地に移転するが、この移転に尽力した新地世話方松原武次郎は「素々宿院山ニ有之候芝居」を購入した、と『松原武次郎成就扣』のなかで述べている。また、宿院芝居は「宿院山之芝居」という別称をもっていた⁽¹¹⁾。先述したように、宿院境内奥には名越岡と呼ぶふたつの小山があり、「山ノ上」と称されていた。「宿院山ニ有之候芝居」、「宿院山之芝居」の「山」とは、名越岡の南北どちらかの小山と考えられる。戎嶋芝居が川端町に移転したおり、「宿院山側」に移転したともいわれた⁽¹²⁾。川端町は宿院境内の北側の一筋隔てた町である。名越岡の鹿島明神を祭る北側の小山に表口が面していた。これらの点から、宿院芝居は宿院境内奥にある、名越岡と呼ばれる鹿島明神を祭る北側の小山付近に立地していたと考えられる。

この移転により、市中のほぼ中央に位置する大寺、宿院にそれぞれ定芝居が立地することとなり、市中のほぼ中央部がさながら芝居町とでも称せられる都市内地域を形成することとなった。文政六年（一八二三）板『役者多見賑』所収の「芝居多見の繁昌略図」をみると、堺の位置に定芝居を意味する印と考えられる丸印を冠して大寺芝居、宿院芝居が記載され⁽¹³⁾、諸国の芝居小屋を見立風に位付した文政八年（一八二五）板『諸国芝居繁栄数望』では、大寺芝居が西前頭十一枚目、宿院芝居が西前頭十二枚目に位付けされている⁽¹⁴⁾。両史料は三都中心の視点であったり、伝聞をもとに作成されたりしているため、その点、考慮せねばならないが、この時期、堺の二軒の定芝居、ひいては「興行地」堺が三都から高い評価を得るまでに成長していたといえる。そのことは先述したように、役者評判記が伊勢、尾張とともに「堺等にての狂言を不漏取調へ」と宣言したことからも窺えよう。

3 宿院芝居から新地芝居へ

市中のほば中央部に芝居町とでもいふべき都市内地域を形成していた大寺芝居と宿院芝居であるが、まず天保七年（一八三六）に宿院芝居が新地に移転する。

宿院芝居の新地への移転を『堺市史』第三巻は天保八年（一八三七）三月としているが、『享和後珍記』天保七年十月条に、

一、宿院山之芝居、此節新地龍神之宮、則川端筋ニ成、此所へ引移し候、当十月下旬棟上ケ有^⑩とあり、天保七年十月には新地に移転し棟上げが行われているので、天保七年九月前後に移転したと考えるべきであらう。

宿院芝居の新地移転の理由は新地繁栄策の一環であつた。日付や経緯については判然しない点があるが、新地世話方を勤めていた松原武次郎が、新地や自分が関わつた新地での事柄をのちにまとめた「松原武次郎成就扣」によると、天保七年九月以前、「新地繁栄ニ可成儀有」れば何なりと上申せよ、との堺奉行所からの諮問があつた。新地は天保二年（一八三一）に通梁工事がなされ、同五年（一八三四）には町名を定めて建家の申請が行われるなどしていた新開地であつた。そのため繁栄策が急務となつていたのであらう。武次郎は堺奉行所の諮問を「西田屋隠居」に相談した。その結果、「素々宿院山ニ有之候芝居」つまり宿院芝居を鍵屋町河内屋利兵衛より「引合之上買求」め新地龍神町に「引直」すことにした。^⑪「十月下旬棟上ケ」があつたので、九月あたりから工事が始まつたのではないであらうか。この移転の際、宿院芝居をそのまま解体し移転したのか、あるいは新築したのかについては定かではない。ただ、『享和後珍記』天保七年十月二十一日冬中条に、

一、米穀追々下直ニ相成候へ共、町方ハ俄ニ非人ニ相成候子供之分、寒氣之時分ニ而何共不便ニ思召、齡節宿

院芝居跡へかり小屋之長家を建、地面へすりぬかを入れて其上へ筵を敷、十三才以下の小供之非人斗凡六拾人ヲ此所ニ宿致⁽¹⁸⁾

とあり、宿院芝居跡に「俄ニ非人ニ相成」つた「十三才以下の小供之非人斗凡六拾人」を収容する「かり小屋之長家」が建てられている。宿院芝居跡地に芝居小屋は存在していないので、新地へ宿院芝居をそのまま解体し移転したのではないであろうか。このおり櫓も移転したようである。

芝居小屋を移築工事している頃は、芝居小屋周辺は「建家無数野原」一面であったが、移築工事も終わる頃には前茶屋も十軒ばかりでき、初舞台にむけて興行環境も整備されていた。この新地芝居は天保十四年に「新地横町」に移転し新地北芝居となる。この移転の際、同時に改築されるが、この時「瓦ふき」となるので、新地芝居は「瓦ふき」ではなかつたようである。

天保八年三月、新地芝居は竹本筆大夫、竹本組大夫、竹本三光齋や吉田兵吉などの一座を招き、晴れて初舞台が行われた⁽¹⁹⁾。この初舞台がどのような座組で、どんな狂言を出したかは不明である。『義太夫年表』では竹本筆太夫、竹本組太夫は、同年二月大坂の「北はり江市のかわ芝居」に同座している⁽²⁰⁾。この一座の太夫や人形遣いは同年三月、四月の大坂での興行番付には名が見えない。また竹本三光齋や吉田兵吉も大坂に出勤していない。そのため初舞台興行の座組は、二月の北堀江市側芝居の座組を基本とし、それに竹本三光齋や吉田兵吉を加えたものであつたのではないであろうか。

『義太夫年表』では竹本筆大夫、竹本組大夫、竹本三光齋（この時は豊竹姓）による、「戌」年三月吉日堺「南島芝居」興行を翌九年（一八三八）三月と推定されている⁽²¹⁾。推定の理由は「本年正月十七日の北堀江市の側芝居と一座の顔ぶれが近い」ことから、番付にある「戌」を天保九年と推定されている。この興行には別番付Bが存在し、それには興行地名が「堺新地南芝居」と記載されている、と解説にある。「新地南芝居」とは、大寺芝居の後身で、

天保改革の取締まりの一環として天保十四年（一八四三）十月頃、新地に移転した芝居小屋である（この時、櫓も移転している）。またこの時期、堺において「南島」とは新地をさす地名である。そのため、この興行が行なわれた「戌」年は天保九年ではなく、嘉永三年（一八五〇）、あるいは文久二年（一八六二）のどちらかの興行であると考えるのが妥当である。また『竹本染太夫一代記』天保八年十二月以降の条に、

一、堺浜の芝居へ出勤。好運にして美名市中に轟き、永当永当の声やむ事なく、役日を増して興行満てぬ。

とあるのを、先にみた番付解説では、これを天保九年の興行であろうか、と指摘されている。この染太夫が出勤した「堺浜の芝居」は、先述した天保八年に初舞台が行なわれた新地芝居であることは、これまでの整理・検討より明らかである。

さて、新地芝居の初舞台興行は「殊之外初日を大入大当り」であり「銀主安心身入宜敷」いもので大成功であった。新地世話方は「打集銀主」として新地芝居に出資し、同時に「前茶屋も兼帯」していた。

（前略）

相生屋

是ハ松原店

京升屋

是ハ西左店

米沢屋

是ハ糠嘉店

是ハ村田店

「興行地」堺と芝居小屋

是ハ

右銀主之内へ木下藤九郎も相加へ御座候、表方取極りもいたし役木戸ニ相成申候、其節前茶屋芝居与申合せ書

織田ニ扣書御座候^⑫

芝居茶屋の屋号の隣りに記されている店名は新地世話方の名前である。また芝居茶屋と新地芝居とが「申合せ書」を交わしているが、この「申合せ書」の「扣書」を保管している「織田」とは松原武次郎その人である。松原武次郎は堺奉行所の新地繁栄策の諮問に対し、新地に芝居小屋を移転させ、銀主、芝居茶屋主として直接、間接にその経営にたずさわっていた。このほかに天保改革によつて摂河泉三か国追放となり堺に赴き、堺戎之町大道で「八幡や」なる小間物屋を営んでいた二代目中村富十郎に舞台復帰するよう説得し成功したことなども彼の業績であり、新地、そして新地芝居にとつて松原武次郎が占めるウエートは非常に高いものであったといえる。

新地芝居に対しては先述したように、松原武次郎をはじめ新地世話方が銀主、芝居茶屋の経営に直接関わっていた。新地芝居はまさしく、新地の、新地による、新地のための芝居小屋であつた。

ま と め

以上、近世界における芝居小屋について、二軒の定芝居を中心に、二軒の定芝居が公許された寛文延宝期から天保改革までの変遷を整理、検討し、両定芝居の移転時期や移転場所、その時期の名称などを確定し、合わせて移転理由やその経緯、それに関する諸問題を考察した。

両定芝居公許以前は、非常設・非常時の興行が一定の手続きのもと、許可されていたようであるが、興行の「場」は定まっていなかったといえる。寛文十年、延宝六年の両定芝居公許により、市中の興行の「場」は特定された。しかし両定芝居、特に戎嶋芝居は度々移転している。このことは、堺の定芝居公許の基本理念が興行の

「場」を特定、固定するというものではなく、市中での興行の「場」の数を特定、固定するものであったといえう。この両定芝居の移転に関して、堺奉行所は単に芝居小屋の立地場所移転については、独自に判断し許可を与えている。時には事後承諾もあった。しかし、両芝居とも櫓名代の移転に関しては上部機構の大坂城代の「相同」いだしていることから、櫓名代については、堺奉行所の専権事項ではなかったことがわかる。

また、鑑町・戒嶋両芝居はそれぞれ大寺境内宿院境内に櫓名代が移転し、大寺芝居、宿院芝居となる。その際、芝居小屋主よりの「櫓借請」の興行願いは両芝居ともに「子供芝居」興行であった。時期は下るが安政七年（一八六〇）三月、天保改革によって禁止されていた堺の寺社内芝居が再興されたおり、堺奉行社より許可された芸能種別は「小共手踊、説教操浄瑠璃、小見世物類」であった^③。堺では寺社境内での興行名義は、「子供芝居」や「小共手踊」といった子供芸であったと考えられる。

最後に、今後の課題を提示したい。本稿では両定芝居の変遷について、紙幅の都合より天保改革までで区切った。そのため天保改革以降の両定芝居については言及できなかった。この点については拙稿において指摘してはいるが、天保改革から明治期以降を射程にいれ、改めて詳細に整理、検討する必要がある。また、定芝居だけではなく、寺社境内での興行や相撲興行にも目を向ける必要がある。そして、堺という都市に住む人々の生活と芸能興行との関わりも考察していきたい。

注

- (1) 『日本庶民文化史料集成』第六巻「歌舞伎」（芸能史研究会編、三一書房、一九七三年、三三六頁）
- (2) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館蔵
- (3) 朝尾直弘「元禄二年堺大絵図を読む」、（『都市と近世社会を考える―信長・秀吉から綱吉の時代まで―』、朝日新聞社、一九九五年、二二三～二二七頁）
- (4) 藤田実「元禄期上方歌舞伎の芝居小屋」（『芸能史研究』一二九号、一九九五年）
- (5) 拙稿「天保改革令と堺の歌舞伎芝居」（『芸能史研究』）

一四〇号、一九九八年)

- (6) 拙稿「近世後期堺における寺社内芝居の動向」(『芸能史研究』一四五号、一九九九年)

- (7) 『堺市史』第三卷、七〇五〜七一二頁

(8) 本稿では「興行地」という言葉を、芸能と芸能興行が存立する社会環境や諸芸能集団の活動、動向を考察するために、次のように概念的に概念的に設定したい。

「諸芸能者あるいは諸芸能集団が芸能興行の慣行、機構、機能を軸に、行政的に、伝統的に芸能を開催するために設定された場所、大規模な舞台芸能の開催が実現可能な芝居小屋が単独、あるいは複数存在する地点の一定範囲」という意味で考えたい。またこの空間的範囲は、時期や行政的動向、諸芸能集団の動向から時として可変的になりうるとも考える。なお、竹下喜久男『近世地方芸能興行の研究』(清文堂、一九九七年)、神田由築『近世の芸能興行と地域社会』(東京大学出版会、一九九九年)を参照した。

- (9) 「堺御手鑑諸方道法り」(『堺市史史料』一六 幕政一四 堺市立中央図書館蔵)、「手鑑抄」(『堺市史史料』一六 幕政一四 堺市立中央図書館蔵)、「元禄六年堺『手鑑』」(『堺市史史料』九 幕政七 堺市立中央図書館蔵)、「元禄十七年堺『手鑑』」(『堺市史史料』十 幕政八 堺市立中央図書館蔵)など。

- (10) 『元禄二己巳歳堺大絵図』(前田書店、一九七七年)
- (11) 『歌舞伎評判記集成』第一期第十卷、(歌舞伎評判記研

究会編、岩波書店、一九七六年、五八五頁)

- (12) 『堺市史史料』写真編(堺市立中央図書館蔵)。なお、この番付は年代不明であるが、上演された「京羽二重娘気質」が明和元年初演であるので同年以降安永九年の間での上演番付と考えられる。

- (13) 「堺御手鑑諸方道法り」(『堺市史史料』一六 幕政一四 堺市立中央図書館蔵)、「手鑑抄」(『堺市史史料』一六 幕政一四 堺市立中央図書館蔵)、「元禄六年堺『手鑑』」(『堺市史史料』九 幕政七 堺市立中央図書館蔵)、「元禄十七年堺『手鑑』」(『堺市史史料』十 幕政八 堺市立中央図書館蔵)、「堺鑑」(国書刊行会編、『続々群書類従』第八、続々群書類従刊行会、一九七八年、六二六〜六二七頁)

- (14) 『堺研究』一三号、五三頁

- (15) 『堺市史』第五巻資料編二、二八八頁

- (16) 『今昔操年代記』(日本演劇文献研究会編『浄瑠璃研究文献集成』、北光書房、一九四四、三四〜四〇頁)

- (17) 宝永八年三月刊「役者大福帳」(歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』第一期第四卷、岩波書店、一九七六年、五七三頁)

- (18) 『堺市史』第三卷、六九五〜七〇五頁、「摂河境小鑑」(『堺市史史料』一 総説一 堺市立中央図書館蔵)など。

- (19) 『歌舞伎評判記集成』第一期第二卷、(歌舞伎評判記研究会編、岩波書店、一九七六年、四八二頁)

- (20) 河合真澄「役者評判記の開口部―西鶴作品の利用をめぐる―」(『国語国文』五〇巻十号、一九八一年)
- (21) 『堺市史史料』十 幕政八 堺市立中央図書館蔵
- (22) 『堺市史史料』一六 幕政一四 堺市立中央図書館蔵
- (23) 『元禄二己巳歳堺大絵図』(前田書店、一九七七年)
- (24) 前掲注(21)、(22)
- (25) 前掲注(23)
- (26) 前掲注(22)
- (27) 前掲注(3)、二二三頁
- (28) 前掲注(22)、(23)
- (29) 前掲注(21)
- (30) 前掲注(22)、(23)
- (31) 『堺市史史料』九 幕政七(堺市立中央図書館蔵)
- (32) 『堺市史』第五巻資料編二、三四―一〇頁
- (33) 『摂河境小鑑』(『堺市史史料』一 総説一 堺市立中央図書館蔵)
- (34) 右同
- (35) 『続堺市史』五九四―五九六頁
- (36) 『鑑町芝居絵図』(『堺市史史料』風俗編 堺市立中央図書館蔵、「戎嶋芝居絵図」(『堺市史』第三巻所収)
- (37) 前掲注(4)、藤田論文
- (38) 右同
- (39) 右同
- (40) 右同
- (41) 『摂陽奇鑑』巻之二十四ノ上(『浪速叢書』、一九二七

- 年、二〇三頁)、土田衛「上方の元禄歌舞伎」(『上方歌舞伎集』、岩波書店、一九九八年、四九一―四九三頁)
- (42) 右、土田論文
- (43) 前掲注(4)、藤田論文
- (44) 『戯場楽屋図絵拾遺』巻之上(『浪速叢書』、一九二七年、二〇二頁)
- (45) 右同
- (46) 前掲注(35)、五九四―五九六頁
- (47) 前掲注(4)、藤田論文
- (48) 前掲注(4)、藤田論文
- (49) 「天保選要類集」芝居之部(『旧幕府引継文書』、国立国会図書館蔵)
- (50) 暉峻康雄「観賞のしおり」(『現代語訳・西鶴 好色一代男』、小学館ライブラリー、一九九二年、三二六頁)
- (51) 『好色一代男』巻五(岩波文庫、一九五五年、一四三―一四六頁)
- (52) 『男色大鑑』(野間光辰編『定本西鶴全集』第四巻、中央公論社、一九七七年、二三八―二四二頁)
- (53) 『難波鑑』第三(『近世文芸叢書』第一、国書刊行会、一九一〇年、五〇四―五〇五頁)
- 住吉大社の御田植における堺の遊女の参加については、江戸時代の諸書においても言及されているが、堺の遊女の参加をめぐる指摘がまちまちである。本文にも引用した延宝八年刊『難波鑑』では「いにしへは、堺の高

洲の傾城」が早乙女として参加していたが、「今（延宝八年時点、筆者注）は傾城どもは」参加せず、人をやとひて代理」を立てている、と指摘している。寛政十年刊『摂津名所図絵』では御田植に「乳守の遊女五人早乙女となる事説々」とあるが「信用」できない、と紹介している。一方、正徳三年刊『滑稽雜談』は両廓より遊女が早乙女として参加していた、と言及している。このように、住吉大社御田植に堺の遊女が早乙女として参加していたかどうかで見解がわかれている。文政六年改堺奉行所「年中行事」五月二十五日条をみると、

一、来ル廿八日住吉御田植早乙女南高須町傾城遣度断例年御用帳ニ留置

とあることから、文政六年段階で継続的に乳守廓の遊女が早乙女として参加していたことは明白である。

諸書の指摘がまちまちであることは、伝聞をもとにしているということであり、考慮する必要があるが、『難波鑑』がいう、延宝八年段階で高須廓の遊女が参加せず、早乙女に代理が立てられたということについては、高須廓が延宝四年より少なくとも貞享五年まで揚屋が一時休業していたという高須廓の内部事情が関係あるのではないであろうか。

また当初は高須廓の遊女が参加していたのが、正徳三年段階には両廓、寛政十年段階では乳守廓単独参加となっていたようであるが、これは高須廓が端女郎しかないない廓で營業的に振るわず、それに反して乳守廓は繁栄し

たことが、乳守廓のみ遊女が参加するようになった要因ではなからうか。

(54) 『堺市史』第三巻、六九四〜七〇四頁、野間光辰「特別寄稿 古図に見る堺の遊郭」（『元禄二己巳歳堺大絵図』、前田書店、一九七七年、一六五〜一六九頁）

(55) 右同

(56) 前掲注(33)及び前掲注(54)

(57) 右同

(58) 前掲注(51)

(59) 守屋毅「江戸の歌舞伎興行界」（林屋辰三郎編『化政文化の研究』、岩波書店、一九七六年、のちに『近世芸能興行史の研究』、弘文堂、一九八五年）に所収。

(60) 近世初期の畿内統治体制に関する代表的研究として、朝尾直弘『近世封建社会の基礎構造』（御茶の水書房、一九六四年）、高木昭作『幕藩初期の国奉行について』（『歴史学研究』四三一号、一九六四年）、藪田貫『摂河支配国論―日本近世における地域と社会―』（協田修編『近世大坂地域の史的分析』御茶の水書房、一九八〇年）、藤井譲治『家綱政権論』（講座日本近世史）第四巻、有斐閣、一九九一年）などの諸先学の論考をあげておく。

また守屋氏は同時期の京都での檐免許再興が、幕府の全国的遠国支配体制の再編成による、京都市中の政策転換と密接な関係があると指摘されている。（前掲注(59)、『京都における興行慣行の確立』、『近世芸能興行史の研

究」、弘文堂、一九八五年)。なお、一九九五年度仏教大學大学院日本史特殊研究における、福島雅蔵先生の講義内容も参照した。

- (61) 享保十九年正月刊「役者三津物」大坂巻(歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』第Ⅰ期第十巻、岩波書店、一九七六年、五三七頁)

- (62) 右同、五三八頁

- (63) 享保二十年正月刊「役者初子壳」京巻(歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』第Ⅰ期第十巻、岩波書店、一九七六年、五八五頁)

- (64) 東晴美「享保歌舞伎へ上方」(『岩波講座 歌舞伎・文楽』第二巻、一九九七年、一二四～一二六頁)

- (65) 享保十五年正月刊「役者美男盡」大坂巻(歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』第Ⅰ期第十巻、岩波書店、一九七六年、七三頁)

- (66) 享保二十一年正月刊「役者福若志」京巻(歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』第Ⅰ期第十巻、岩波書店、一九七六年、六七六頁)

- (67) 前掲注(65)、七三頁
(68) 諏訪春雄「享保改革下の中京演劇―享元絵巻考―」(『国語と国文学』、一九七四年)

- (69) 前掲注(64)、東氏論文。

- (70) 「文化十年堺『手鑑』」(『堺市史』第五巻資料編二、一五〇頁)

- (71) 曾根研三「開口神社史私稿」(『開口神社史料』所収、

開口神社、一九七五年)、「解説、開口神社について―開口神社文書を中心に―」(担当 尼見清市氏)(『堺市博物館昭和五七年度春季特別展図録『都市の信仰史』、堺市博物館、一九八二年)

- (72) 「和泉名所図絵」(柳原書店、一九七六年、一五六～一五七頁)

- (73) 現在、都市史や建築史の立場から研究が進められているほか、芸能史、宗教史からもアプローチされている。

- (74) 前掲注(72)、五六～五七頁

- (75) 「堺研究」一三三号、二五頁

- (76) 大寺芝居が「塔西際」より「西門脇北側」に移転したいきさつについては、「一札事」(『開口神社史料』、開口神社、一九七五年、三八八～三八九頁)より引用した。

- (77) 「常楽寺文書」(『堺市史史料』風俗編 堺市立中央図書館蔵)

- (78) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵番付、(請求番号ロ19―8―17)

- (79) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵番付、(請求番号ロ21―26―82)

- (80) 「寺社方書留」(『堺市史史料』四 幕政二 堺市立中央図書館蔵)

- (81) 服部幸雄「二 興行を支える人たち」(『江戸歌舞伎』、岩波書店 同時代ライブラリー、一九九三年、七六～七七頁)

- (82) 宝永八年三月刊「役者大福帳」(歌舞伎評判記研究会

編『歌舞伎評判記集成』第Ⅰ期第四卷、岩波書店、一九七六年、五二四頁

(83) 正木ゆみ「元禄歌舞伎へ上方」(『岩波講座 歌舞伎・文楽』第二卷、一九九七年、六七〜六八頁)

(84) 前掲注(82)

(85) 青木繁「寛政以後上方劇壇の動向」(『芸能史研究』一〇四号、一九八九年)

(86) 右同

(87) 岸本一郎「宿無団七時雨傘」の新資料、並「お吉伊三郎百年忌真田山恋」(『近世文芸』一七号、一九八〇年)

(88) 『宿無団七時雨傘』(『日本戯曲全集』第四卷、春陽堂、一九二九年、三〇〇〜三〇一頁)。

『歌舞伎名作選』第八巻所収の『宿無団七時雨傘』では、親方 わしは又戎嶋にをりまして、常時見てをりまする

によつて、何ともござりませぬ。今度、中の芝居が南へ来たので、お祭りのやうに思ふて見たうござります。

となつており、春陽堂のものとは台詞の異同がある。ただ、大坂からの引越興行が堺の「南」にある芝居小屋で興行した、という設定は同じである。

(89) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵番付(請求番号ロ一21-8-12)

(90) 前掲注(5)、拙稿参照

(91) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵番付(請求番号ロ一21-8-38)

(92) 前掲注(6)、拙稿参照

(93) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵番付(請求番号ロ一21-46-147)

(94) 前掲注(5)、拙稿参照

(95) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵番付(請求番号ロ一21-46-13 ロ一21-46-133)

(96) 『宿無団七時雨傘』については土田衛先生のご教示をいただいた。謹んで深謝いたします。

(97) 『糸乱記』(中田易直編、近藤出版社、一九七九年、八頁)

(98) 前掲注(33)及び前掲注(3)朝尾論文参照

(99) 前掲注(70)

(100) 前掲注(72)五六〜五七七頁

(101) 『阪急学園池田文庫所蔵 芝居番付目録2』(阪急学園池田文庫編、一九八四年)

(102) 前掲注(70)

(103) 『老圃歴史』5(『堺研究』十三号、三頁)

(104) 前掲注(70)

(105) 右同

(106) 前掲注(13)、『堺鑑』(国書刊行会編、『続々群書類従』第八、続々群書類従刊行会、一九七八年、六二七〜六二八頁)

(107) 寛政十年刊『摂津名所図絵』(『日本常民生活史料集成』第二十二巻 祭礼、一九七九年、六三三頁)

(108) 『堺市史』第五巻資料編二、六六三〜六六四頁

- (109) 「享和後珍記」(大谷女子大学資料館編『大谷女子大学資料館報告書』第二十六冊、一九九二年、一二二頁)
- (110) 前掲注(103)、六頁
- (111) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館蔵
- (112) 庵詮蔵「文政八年版『諸国芝居繁栄数望』について」『芸能史研究』二十号、一九六八年
- (113) 前掲注(109)、一二二頁
- (114) 前掲注(108)、六六三〜六六四頁
- (115) 前掲注(109)、一二二頁
- (116) 前掲注(108)、六六三〜六六四頁
- (117) 右同
- (118) 右同
- (119) 『義太夫年表』近世編 第三卷上(天保〜弘化)(義太夫年表近世編刊行会編 八木書店、一九八一年、二六〇〜二六四頁)
- (120) 右同、二八三〜二八四頁
- (121) 『染太夫一代記』(井野辺潔・黒井乙也校訂、青蛙房、一九七三年、一二二頁)
- (122) 前掲注(108)、六六三〜六六四頁
- (123) 前掲注(5)、拙稿参照
- (124) 前掲注(6)、拙稿参照

追記 本稿作成にあたり、竹下喜久男先生、今堀太逸先生、山路興造先生よりご指導、ご教示をいただいた。土

田衛先生からは『宿無団七時雨傘』についてご教示をいただいた。ここに謹んで深謝いたします。

